

令和 2 年 5 月 30 日現在

機関番号：12601

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K18695

研究課題名（和文）色嗜好の多様性と流動性に関する実験心理学的研究

研究課題名（英文）Experimental psychological study on variety and fluidity of color preference

研究代表者

横澤 一彦（Yokosawa, Kazuhiko）

東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・教授

研究者番号：20311649

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,900,000 円

研究成果の概要（和文）：文化的な構えにより環境の物理的变化を伴わずに参加者の構えを操作したときに色嗜好が変化するかなどについて検討した。例えば、日本人参加者に対して色セットを「米国で使われている色」または「日本で古来から使われている色」として呈示したときと、何も文化的な構えを与えないときとの色嗜好を比較した。参加者が各色に対して主観的に米国色らしいかまたは日本伝統色らしいと感じるかを調べることにより、各色とそれぞれの文化的構えとの関連の強さを見た。その結果、色嗜好には変化が生じ、さらにその変化量は色と文化的構えとの関連の強さと正の相関があった。このことから、文化的な構えが色嗜好に影響することを明らかにできた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

嗜好や美感に関する文化差について実験心理学的検討を行い、日本文化における美感の基礎指標としての色嗜好は、物体や抽象的概念の寄与によって形成されていることを明らかにできたことが学術的意義である。必ずしも色そのものの嗜好に日本文化の特徴があるのではなく、抽象概念も加味して色嗜好が決定される際に日本文化など、様々な文化の特徴が反映されることを明らかにできたことに社会的な意義もある。

研究成果の概要（英文）：This study investigated whether color preferences changed when the mental set on color was manipulated, by providing participants with instructions about different cultural sets without any physical change in the environment. To this end, we compared the color preferences of Japanese participants under three different cultural sets, namely, “colors that are used in America,” “colors of Japanese traditional culture,” or no specified cultural set. We also investigated the degree to which participants matched colors with each cultural set, i.e., American or traditional Japanese. The results demonstrated the modulation of color preferences. Furthermore, the size of the modulation for each color positively correlated with the degree of the match between each color and each cultural set, suggesting that the cultural set affected the color preferences.

研究分野：実験心理学

キーワード：色嗜好 実験心理学 美感 統合的認知 物体嗜好 文化的構え

1. 研究開始当初の背景

Cognitive Science 誌に掲載された学術論文 (Yokosawa, Schloss, Asano, & Palmer, 2016) において、日本人、米国人、留学生を対象にした色嗜好(color preference)を調べ、青色などの寒色系が好まれ、暗いオレンジや黄色が嫌われることが共通する一方、日本人は高明度色を好む相違点があることを報告した。単なる色の好悪に文化差があり、それが美感の基礎的指標になる可能性を指摘した。ただし、色嗜好に関する文化差の研究は、日本人の色嗜好を他国の色嗜好と国際的に比較した研究(Saito, 1994, 1996)に限っても、様々な要因によって決定され、それらを整理すると、快-不快感情による普遍的嗜好、個体要因による個人的嗜好、環境要因による社会的嗜好という3つの要因に影響されるものの、色嗜好は固定的ではなく、流動的と捉えられてきた(齋藤, 1997)。しかしながら、Yokosawa ら(2016)の研究で重要なのは、色嗜好の要因を定量的に説明し、日米の色嗜好の要因が根本的に異なることを示したことにある。5段階の分析が行われ、第1段階では色嗜好を測定し、第2段階で各色による連想物体を自由回答させ、第3段階で自由連想された物体と色の一致度を評定させ、第4段階では物体嗜好度が測定される。第5段階で物体嗜好度と一致度の加重和と、色嗜好の相関を算出する。色嗜好とWAVE 値の相関係数は、米国人の場合 0.89 となり、生態学的誘発理論(Palmer & Schloss, 2010)が主張する、好きなものの色が好きになるという単純な図式で説明できたが、日本人の場合に 0.61 にしかならず、説明しきれないことを示していた。

2. 研究の目的

色嗜好は文化によって確定するものではなく、判断時点でその色と強く結びついた事物の嗜好度を動的に反映する可能性がある。このように考えると、文化と美感に関して、根底から考え直す必要があり、そのような関係解明に挑むことを目的とする。具体的には、日本人の色嗜好が具体的な事物の好悪だけでは決定できず、色嗜好判断の直前に、その色から「和風/洋風」などの概念から連想される事物を想起させ、意識的に連想されることが色嗜好に影響することを明らかにすることを目指した。次に、特定の色を有する対象の呈示(具体的には、ユニフォームの色の違いが明確なサッカーの試合を鑑賞)による、色嗜好への動的な影響を確認することを目指した。日本人の色嗜好が物体嗜好度や抽象概念の嗜好度の組み合わせで説明できるかどうかを調べることにより、嗜好や美感に関する文化差を実験心理学的に解明することを目的とした。

3. 研究の方法

色嗜好を認知心理学的実験で調べた。刺激色として使用した32色は、Palmer & Schloss (2010)と同じものを用いた。この32色は8つの色相、すなわち赤(Red)、黄赤(Orange)、黄(Yellow)、黄緑(Chartrreuse)、緑(Green)、青緑(Cyan)、青(Blue)、紫(Purple)と4つのカット2(中間的明度かつ高彩度の「高彩度条件(Saturated)」、高明度かつ低彩度の「高明度条件(Light)」、中間的明度かつ低彩度の「中間条件(Muted)」、低明度かつ低彩度の「低明度条件(Dark)」)を掛け合わせた有彩色であった。刺激色は、CIE1931xyY表色系に基づいて各色の色度および輝度を設定し、Palmer & Schloss (2010) で用いられた刺激色と同等になるように調整した。刺激の呈示画面には、32色(刺激色)の正方形が画面中央に1つずつ呈示された。32色はランダムに呈示され、呈示される順序は参加者および各課題によって異なっていた。

4. 研究成果

和室と洋室、和食と洋食といったように、われわれ日本人は日本の伝統的な事物を指す「和風」という概念と、欧米の事物を指す「洋風」という概念に日常的に接している。歴史的に日本は外来文化を取り込んで発展してきたが、開国後は一挙にさまざまな外来文化が流入した。明治以降は西洋化を推し進め、太平洋戦争後は米国文化にも同化しようとしてきた。しかしそれによって日本の伝統的な文化が駆逐されるということではなく、日本人は欧米文化・伝統文化どちらも共存して受容した。この二つの文化は、それぞれが指す事物のみならず、色という観点においても特徴的な違いがある。日本伝統色については、江戸時代に使われていた色の復元色票500種以上を計量的に分析した研究において、その8割以上を占める有彩色の中には黄・橙・赤系が多く見られるが青緑色が非常に少ないこと、にぶい色や暗い色が多いが鮮やかな色や明るい色が少ないことが示されている。一方、欧米の色については、たとえば建築の分野では開国の頃に洋風の建築様式とともにペンキが輸入されて素材による色ではなくペンキによる塗装色が日本に誕生し、20世紀以降には化学工業の発達により顔料や染料の色彩が豊かになり、高彩度の色も含めた多様な色が町並みに利用されるようになったという歴史的経緯が存在する。このような知見や事例から考えると、伝統的な事物には彩度および明度の低い特定の色相がともなう傾向があるのに対し、日本における欧米の事物には鮮やかで多様な色がともなう傾向があると言える。日常的にこれらの事物に接している日本人であれば、欧米由来の事物ないしは

日本で古来使われている事物、およびそれらの色についてのイメージが、各個人の中で形成されているので、文化的な構えを作りやすいと予測される。よって本研究では、欧米、特に今回はイメージをより明確にするため対象を米国に絞り、米国で使われている色という意味での「米国情」と、日本で古来使われている色という意味での「伝統色」のそれぞれを文化的な構えとして用いることにした。何も構えを与えないときの色嗜好をベースラインとして、米国情/日本伝統色という文化的な構えを与えたときの色嗜好の変化を調べ、その色嗜好の変化の大きさと、主観的に米国情/伝統色らしいと感じる度合いとの関係について検討し、色嗜好と文化的構えの関連性を明らかにした。

実験参加者は、米国情に関する実験には38名(男性27名、女性11名、平均21.3歳)が参加した。日本伝統色に関する実験には40名(男性20名、女性20名、平均21.8歳)が参加した。いずれも日本で生まれ育った大学生または大学院生であり、実験遂行に問題の無い正常な色覚を有していた。

米国情に関する実験の参加者(以下、米国情実験群)は、文化的構えを与えないときの単色嗜好度評定課題、米国情としての単色嗜好度評定課題、米国情らしさ評定課題の順に実験を行った。すべての課題は5月から6月にかけて実施された。日本伝統色に関する実験の参加者(以下、伝統色実験群)は、文化的構えを与えないときの単色嗜好度評定課題、日本伝統色としての単色嗜好度評定課題、日本伝統色らしさ評定課題の順に実験を行った。すべての課題は7月から8月にかけて実施された。なお、以下の各課題では、刺激色32色はすべて異なるランダム順に呈示された。

文化的構えを与えないときの単色嗜好度評定課題では、参加者には、実験の目的は色の好みを調べることでありと伝え、様々な色の正方形に対し、その色をどれだけ好きであるかを評定するよう教示した。実験が開始されると、ディスプレイに32色のうちランダムに選ばれた1色と、両端にそれぞれ「まったく好みではない」と「とても好みである」というラベルが付記され中心にゼロ点を示す縦線がつけられた直線が呈示された。参加者はマウスを左右に動かすことで直線上のポインターを操作し、ポインターが参加者の感じる嗜好度に合ったところでマウスをクリックした。参加者が直線上でクリックした位置は、後に数直線を「まったく好みではない」(-100)から「とても好みである」(100)までの201段階のスケールとした時に対応する数値に変換された。参加者が嗜好度を回答すると色刺激は消え、次の色刺激が呈示された。

米国情/日本伝統色としての単色嗜好度評定課題では、米国情実験群には、実験の目的は米国情の好みを調べることでありと伝えた。様々な色の正方形を米国情であるという説明とともに呈示し、その色をどれだけ好きであるかを評定するよう教示した。米国情への理解を統一するために、米国情とは「米国で使われている色」であるという教示も加えた。伝統色実験群には、実験の目的は日本伝統色の好みを調べることでありと伝えた。様々な色の正方形を日本の伝統色であるという説明とともに呈示し、その色をどれだけ好きであるかを評定するよう教示した。日本伝統色への理解を統一するために、日本伝統色とは「日本で古来から使われている色」であるという教示も加えた。実験が開始した後の刺激画面および試行の流れはどちらの実験群も単色嗜好度評定課題と同じであった。

米国情らしさ/日本伝統色らしさ評定課題では、米国情実験群には、実験の目的は日本人がどのような色を米国情と見なすのかを調べることでありと伝え、様々な色の正方形に対し、その色がどれだけ米国情らしいかを評定するよう教示した。伝統色実験群には、実験の目的は日本人がどのような色を日本伝統色と見なすのかを調べることでありと伝え、様々な色の正方形に対し、その色がどれだけ日本伝統色らしいかを評定するよう教示した。実験開始後の刺激画面および試行の流れは、数直線の両端に付記されるラベルが米国情実験群では「まったく米国的ではない」および「とても米国的である」になり、日本伝統色実験群では「まったく伝統的ではない」「とても伝統的である」になった他は、単色嗜好度評定課題と同じであった。

実験の結果、米国情実験群における文化的構えを与えないときの単色嗜好度について、カットと色相を要因とした2要因参加者内分散分析を行ったところ、カットの主効果が有意であった($F(3, 111) = 16.25, p < .001, \eta^2 = .061$)。ライアン法による多重比較により、高彩度条件と高明度条件の嗜好度が、中間条件と低明度条件の嗜好度よりも1%水準で有意に高いことが分かった。高彩度条件と高明度条件の間、中間条件と低明度条件の間にはそれぞれ嗜好度の有意差は認められなかった。また、色相の主効果も有意であり($F(7, 259) = 12.13, p < .001, \eta^2 = .102$)、多重比較の結果、赤と黄赤および黄と黄緑の間を除いて他の全ての色相間に嗜好度の有意差が認められた。さらに、色相とカットの交互作用が有意であった($F(21, 777) = 5.365, p < .001, \eta^2 = .044$)。単純主効果の検定では橙、黄、黄緑、緑、青緑、青におけるカットの単純主効果、および4カットすべてにおける色相の単純主効果が有意となった。橙、黄、黄緑、緑、青緑、青におけるカットの単純主効果についてそれぞれ多重比較を行ったところ、橙および黄では高彩度条件と高明度条件の嗜好度がもっとも高く、次いで中間条件、低明度条件の順に嗜好度が低かったのに対して、黄緑、緑、青緑では中間条件と低明度条件との間に嗜好度の有意差は認められなかった。

伝統色実験群における文化的構えを与えないときの単色嗜好についても同様にカット、色相の2要因参加者内分散分析を行ったところ、カットの主効果が有意であった($F(3, 117) = 15.92, p < .001, \eta^2 = .055$)。ライアン法による多重比較の結果より、高彩度条件と高明度条件の嗜好度がもっとも高く、次いで中間条件、低明度条件の順に低いことが分かった。また、色相の

主効果も有意であり ($F(7,273) = 14.29, p < .001, \eta^2 = .106$) 多重比較の結果、赤と黄赤の間を除いて他の全ての色相間に嗜好度の有意差が認められた。さらに、色相とカットの交互作用が有意であった ($F(21,819) = 8.538, p < .001, \eta^2 = .063$)。単純主効果の検定では、米国色実験群と同様に、橙、黄、黄緑、緑、青緑、青におけるカットの単純主効果、および4カットすべてにおける色相の単純主効果が有意となった。橙、黄、黄緑、緑、青緑、青におけるカットの単純主効果についてそれぞれ多重比較を行ったところ、橙、黄、青緑では低明度条件が他の条件よりも嗜好度が低かったのに対して、黄緑、緑では高彩度条件と高明度条件のときに中間条件と低明度条件のときよりも嗜好度が高いという関係が見られた。

両群の文化的構えを与えないときの単色嗜好は、それぞれの分析では中間条件と低明度条件の嗜好度の関係、および赤と黄赤の嗜好度の関係について違いが見られたものの、両群の32色の単色嗜好度について群、カット、色相の3要因混合計画分散分析で直接比較した結果、群とカットの交互作用、群と色相の交互作用、および群、カット、色相の交互作用はいずれも有意ではなく (それぞれ $F(3,228) = 1.14, p = .33, \eta^2 = .002$; $F(7,532) = 0.78, p = .60, \eta^2 = .003$; $F(21,1596) = 0.82, p = .69, \eta^2 = .003$)。カット、色相、および色ごとのいずれのレベルにおいても群間での嗜好度の有意差は認められなかった。このことを踏まえ、本研究では、両群における単色嗜好に違いはないとみなす。

文化的構えを与えない場合と比べて嗜好が変化した色を調べるため、課題 (文化的構えを与えない単色嗜好度評定 / 米国色として見た時の単色嗜好度評定) カット、色相の3要因参加者内分散分析を行ったところ、カット、色相の主効果および課題とカット、課題と色相、カットと色相の交互作用に加えて、課題、カット、色相の3要因の交互作用が5%水準で有意となった ($F(21,777) = 1.677, p < .05, \eta^2 = .005$)。単純交互作用の検定では、高彩度条件および中間条件における課題と色相の単純交互作用が有意、高明度条件における課題と色相の単純交互作用が有意傾向となった。それぞれについて単純・単純主効果の検定を行ったところ、米国色として色を見た場合に、高彩度条件では赤、黄、紫の嗜好度が上昇する一方で黄緑の嗜好度が低下し、高明度条件では緑、青緑の嗜好度が低下し、中間条件では緑、青緑、青の嗜好度が低下したことが分かった。

文化的構えを与えない場合と比べて嗜好が変化した色を調べるため、課題 (文化的構えを与えない単色嗜好度評定 / 日本伝統色として見た時の単色嗜好度評定) カット、色相の3要因参加者内分散分析を行ったところ、カット、色相の主効果および課題とカット、課題と色相、カットと色相の交互作用に加えて、課題、カット、色相の3要因の交互作用が有意となった ($F(21,819) = 1.783, p < .05, \eta^2 = .005$)。単純交互作用の検定では、高彩度条件、中間条件、低明度条件における課題と色相の単純交互作用が有意となった。それぞれについて単純・単純主効果の検定を行ったところ、日本伝統色として色を見た場合に、高彩度条件では緑、青緑の嗜好度が低下し、中間条件では黄緑の嗜好度が上昇し、低明度条件では赤、黄、黄緑の嗜好度が上昇した一方で紫の嗜好度が低下したことが分かった。

このように、米国色として見たときと伝統色として見たときの色嗜好の変化はそれぞれの群で異なっていた。群間での文化的構えの影響の違いを直接比較するため、文化的構えを与えないときの単色嗜好と米国色 / 伝統色として見たときの単色嗜好の差分を取り、その差分について群 (米国色群 / 伝統色群) カット、色相の3要因混合計画の分散分析を行った。その結果、群とカットの交互作用、および群と色相の交互作用が有意となった (それぞれ $F(3,228) = 5.742, p < .001, \eta^2 = .010$; $F(7,532) = 2.814, p < .01, \eta^2 = .011$)。群とカットの交互作用については、多重比較の結果、高彩度条件、高明度条件、中間条件において2群で課題間の嗜好度の差分が有意に異なっていた。群と色相の交互作用については、多重比較の結果、黄緑と紫において2群で課題間の嗜好度の差分が有意に異なっていた。すなわち、米国色と伝統色という2つの異なる文化的構えが、色嗜好に対して異なる影響を与えていたことを直接的に確認することができた。

米国色実験群による32色の米国色らしさの評定、および日本伝統色実験群における32色の日本伝統色らしさの評定値には強い負の相関が見られ ($r = -.71$) 両者は大きく異なっていた。高彩度条件の色は米国色らしいが伝統色らしくなく、中間条件の色と低明度条件の色は伝統色らしいが米国色らしくないと評定される傾向が見られた。

32色の米国色らしさ / 伝統色らしさの評定値と、文化的構えを与えない単色嗜好に対する米国色 / 伝統色として見た時の単色嗜好の上昇・減少値との相関は、どちらも中程度の正の相関を示し (それぞれ $r = .61, .43$, いずれも $p < .05$)。米国色 / 伝統色らしいと感じられる色ほど米国色 / 伝統色として見た時に色嗜好が上昇し、逆に米国色 / 伝統色らしくないと感じられる色ほど色嗜好が低下するという対応関係があることが分かった。

米国色実験群でも、日本伝統色実験群でも、文化的構えを与えない時の単色嗜好には「平均的に高彩度条件および高明度条件の色が、中間条件および低明度条件の色よりも好まれる」「橙および黄色は低明度条件のものがもっとも好まれない」という傾向が一貫して見られた。これらの傾向は、日本人とアメリカ人の色嗜好を調べた先行研究 (Yokosawa, Schloss, Asano, & Palmer, 2015) の日本人参加者の単色嗜好でも見られた。特に前者の傾向は、その先行研究において、高明度条件と中間条件の色の嗜好度に差が見られないアメリカ人の色嗜好と比較した場合の日本人の色嗜好の特徴として挙げられている。本研究で別の日本人参加者群でも同じ色嗜好の傾向が確認されたことから、この傾向は若年層の日本人に頑健に見られる色嗜好の特徴

であると言える。

文化的構えを与えない時と比べ、米国色として色を見た時には32色中9色の、日本伝統色として色を見た時には32色中7色の嗜好度が有意に変化した。米国色として見た時には主に高彩度条件の色の嗜好度が上昇し、高明度条件および中間条件の色の嗜好度が低下した。高彩度条件の色をより好むようになるという点においては、米国人が高彩度条件の色を好むという色嗜好 (Palmer & Schloss, 2010; Yokosawa et al., 2016) と一致する。一方、日本伝統色として見た時には主に中間条件および低明度条件の色の嗜好度が上昇し、高彩度条件の色の嗜好度が低下した。

同じ色セットに対する米国色らしさの評定と日本伝統色らしさの評定は異なるパターンを示した。高彩度条件の色は米国色らしいが伝統色らしくなく、中間条件と低明度条件の色は伝統色らしいが米国色らしくないと評定される傾向が見られた。この結果は、江戸時代に使用されていた色にはにぶい色や暗い色が多いという傾向、および洋式塗料であるペンキによって自然素材の塗料に比べ鮮やかな発色が可能になったという歴史的経緯とも整合する。この米国色らしさ / 日本伝統色らしさの評定値と、米国色 / 伝統色として見た時の色嗜好の変化との相関を調べたところ、米国色 / 伝統色らしいと感じられる色ほど米国色 / 伝統色として見た時に色嗜好が上昇し、逆に米国色 / 伝統色らしくないと感じられる色ほど色嗜好が低下するという対応関係が見られた。これらの結果は、「米国色」「日本伝統色」という文化的構えが色の嗜好度を変化させたことを示唆する。環境の物理的変化が無くとも、教示によって色を見る時の文化的構えを操作することにより色嗜好が変化することを示したので、色嗜好は、その色をどのような文化の中に位置づけて認識するかというような、その時々参加者の色に対する認知的構えを受けて柔軟に変動することが明らかになった。

色嗜好への文化の影響について、国内での実験研究にとどまらず、ドイツのチュービンゲン大学との共同研究が実現したことで新たな展開をした。ドイツ人を対象として、色から日本文化の事物を想像させた時に個人の色嗜好がどのように変化するかを調べた。ドイツ人参加者はいずれも日本のことは短期の旅行や各メディアを通じてのみ知っている程度だったが、そのような日本の知識でも色と結びつくことで色嗜好を変化させた。色嗜好の変化は、色から日本の伝統的な風景などを想像し、日本の伝統物に典型的な色の嗜好を上げ、元々持っていた色と事物の連想が抑制され、嫌いな事物との連想が抑制されたことで嗜好度が上昇したと推測される。いずれの理由も、異文化の想像が個人の色と事物の連想を変化させ、色嗜好を動的に変化させるという生態学的誘発性理論の予測を支持するものであった。さらに、関連研究としてチュービンゲン大学が保有する広色域が呈示可能な量子ドットディスプレイを用いて、自然画像の彩度を一般的な色域 (Rec 709) から広色域 (Rec 2020) のみで呈示可能なレベルまで変化させ、最も好ましいと感じられる画像の彩度、および好悪や強弱など主観的印象の変化との関係を調べ、主観的印象は画像彩度が上がっても下がらないことを確認した。広色域ディスプレイでは画像の彩度はその印象にポジティブな効果を与えることが多いことが分かった。

色嗜好度評定課題において、色嗜好を評定する直前に、その色から連想される事物を想起させ、連想されることが色嗜好に影響するかどうかを調べ、その色から連想した事物の嗜好度を反映する形で動的に変化することを確認した。具体的には、実験参加者にユニフォームの色の違いが明確なサッカーの試合 (青ユニフォームのアイスランドと赤ユニフォームのオーストリア戦) を鑑賞させ、その前後での色嗜好の変化を確認した。実験操作において、実験者が実験参加者に対してどちらかのチームを応援するように指示することはしなかった。この2カ国の対戦以外にも、青赤ユニフォームの対戦となる日韓戦の動画を用意し、片側のチームへの没入度や勝敗の行方を統制し、色嗜好への短期的な影響も調べた。この実験により、条件毎に色嗜好が動的に変化すること、すなわち赤色のユニフォームのチームを応援していた後には赤色の嗜好度が上昇するが確認され、特定の環境に実験参加者を置くような条件付けにより、色嗜好が無意識のうちに短期的に変化することも明らかにした。すなわち、色嗜好は文脈に依存して、まさにその色の評定をしようとしているときにその色に付随して思い浮かべる物体や抽象的概念に応じて計算されると考えられる。個々の実験参加者のスポーツ嗜好度や国別の親密度などの影響、さらに動画にどれくらい没入していたかという没入度の影響も測定し、それらが色嗜好に影響を与えるかどうかをあわせて確認した。

いずれの研究も、国内外での学会での研究発表や学術論文により評価を受け、監修を担当している学術書のシリーズにおいて、「美感-感と知の統合-」(2018, 勁草書房) を上梓し、その中で色嗜好研究を中心に紹介する章の執筆を担当した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Erika Kumakura, Katja Schmid, Kazuhiko Yokosawa, & Annette Werner	4. 巻 44
2. 論文標題 Subjective evaluation of natural high-saturated images on a wide gamut display	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Color Research and Application	6. 最初と最後の頁 886-893
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.1002/col.22409	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 熊倉恵梨香、信田拓也、浅野倫子、横澤一彦	4. 巻 38
2. 論文標題 文化的な構えが色嗜好に与える影響	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 基礎心理学研究	6. 最初と最後の頁 26-32
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.14947/psychono.38.4	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Erika Kumakura, Annette Werner, & Kazuhiko Yokosawa
2. 発表標題 Effect of imagining another culture on color preference
3. 学会等名 The 18th annual meeting of the Vision Sciences Society (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Kazuhiko Yokosawa, Takuya Nobuta, & Michiko Asano
2. 発表標題 The relationship between color preference and traditional culture
3. 学会等名 The 59th annual meeting of the Psychonomic Society (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 熊倉恵梨香, Annette Werner, 横澤一彦
2. 発表標題 異文化の想像が色嗜好に与える影響
3. 学会等名 日本心理学会第82回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 熊倉恵梨香, Katja Schmid, 横澤一彦, Annette Werner
2. 発表標題 広色域ディスプレイにおける画像の彩度と主観的印象の関係
3. 学会等名 日本基礎心理学会第37回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 熊倉恵梨香, 信田拓也, 浅野倫子, 横澤一彦
2. 発表標題 日本人の色嗜好における文化依存性についての検討
3. 学会等名 第17回「注意と認知」研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yokosawa, K., Kita, S., & Asano, M.
2. 発表標題 Becoming a “bandwagon fan” of a sports team immediately increases preference for colors associated with the team
3. 学会等名 58th Annual Meeting of the Psychonomic Society (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 三浦 佳世、川畑 秀明、横澤 一彦	4. 発行年 2018年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 288
3. 書名 美感 ー感と知の統合ー	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----